

「Contemplation 4」

～神の国とその義～

I 列王記 17 章

イスラエルにエリヤという預言者が現れ、アハブ王に「数年間雨が降らない」という預言をしました。それは神様に不従順な人々に対する罰でした。

その預言により偶像礼拝をしていたアハブ王の怒りにふれ、追われる身となったエリヤですが、神様は決して彼をそのままにして置かれる方ではありませんので、救済措置を用意します。それはカラスが運んでくるパンと肉を食べ、川の水を飲み養われよ、というものでした。しかし預言通り、そのうち川が枯れてしまったので、神様は次に示す場所に行き、そこでやもめの女が養うと神様が約束されました。エリヤはその地に向かいます。またもその通りに実行したエリヤが初めてやもめの女に会った時、「貧しくて死のうとしていいる」と生きることに絶望していましたが、エリヤの「主が雨を降らす日まで食料が尽きない」という音信により、生きる気力がわきます。すべて神様の言葉通りに従うと、幾日も食べることに事欠くことなく暮らすことができました。しかしその後、やもめの女の息子が病死すると、女は悲しみに暮れエリヤに恨み言を言います。しかし、エリヤは奇跡を起こし息子を生き返らせると、女はエリヤが神様から遣わされ、主こそ真実の神であることを理解したのです。

① Jesus is Alive

イエス様は生きておられる

私たちは自分たちの都合で、イエス様をないがしろにしてはいないでしょうか？

なぜ私がこんな目に…そのなぜは過去に掘り下げて向けられていたり、後悔ばかりを起こさせるようなものではないでしょうか？一番大切なことは神様に素直に向き合うことです。順番を間違えてはいけません。過去にあったその問題は、それを通して学びを与えたい、許しあつての問題ですから、過去を思い後悔になぜを置くことをせず、神様の緻密な計画を感謝してあきらめず求め続けます。

願った祝福を与えたいという神様の祝福、心の中心に神様を置いて前に進みましょう。

② 知恵は「聞受行」で実

沈思黙考：黙想とは、目を閉じて静かに自らの内面に深く沈思し、信じる信仰における絶対的な存在と触れ合い、人生、生きるこの意味について思いをめぐらす行為。

素直に聞いていますか？静まって聞く時間や場所を持っていますか？そして、黙想の説明にわざわざ書かれているように、信じる信仰における絶対的な存在と触れ合っていますか？

実を結ぶためには、祈りの中で大切な声を聞き、しっかりとそれを受け止め、行う必要があるのです。日々の祈りの中で、大切な声を聞けるまで静まって集中し、そして日々の生活の中で行うことが、

③ 人生は刺繍の裏

一つ一つの小さな決断という日々の積み重ねを、刺繍になぞらえ一針一針を丁寧に刺したその裏を見れば、いかにその積み重ねの丁寧な作業が大切であり労のいることかを知ることができます。私たちは確実に正しくその一針をあるべきところに刺すがごとく、神の国とその義とを第一にして御言葉を行うものにならなければなりません。

まとめ

神様がこの時に救おうとされる働きと同時に、私たちの環境や考えを通して健全に神様に向き合おうとすることを妨げる働きがあることを忘れず、祈りをもって備えます。先に神様を知っている私たちを通して、その言動を通して、伝えたいこと、伝えられることがあります。その言葉に真実のあるものとして用いられますから、そのひとつづつの決断を見極め、正しい道を選択しているかを静まってその声を聞き、受け止め、行います。

(要約者:牧 三貴子)

(11月13日)